7.21 水 第396回 定期演奏会

堀 朋平(音楽学、国立音楽大学講師)

ベドルジハ・スメタナ(1824-1884)
連作交響詩「わが祖国」

解放への祈願

「チェコ人はドイツ語もロシア語も嫌いなのよ……」。映画『コーリャ 愛のプラハ』(1996年チェコ)に語られるセリフのとおり、この国の歩みは圧政との闘いであった。南西をドイツ・オーストリアにがっちり抑えられ、東方からはソビエト連邦に苦しめられた。抑圧から解放されたのは、ようやく1989年のこと。翌年の「プラハの春」音楽祭で鳴り響いた《わが祖国》(R.クーベリック指揮)は世界に大きな感動を与え、いまも大きな記念碑でありつづけている。

この解放が、160年以上も前に生まれた作曲家によって熱く念願されていた事実には驚かされる。裏を返せば、スメタナの生きた19世紀にも、チェコは隣国に苦しめられていたということだ。相手は、西のオーストリア=ハプスブルク帝国。長らくその支配下にあったチェコでは、ヨーロッパ中を巻き込んだ1848年の革命を機に「民族独立」への機運が高まるも、まもなく保守派に抑えられ、この国はふたたび独裁制による暗い検閲の時代を迎える――束の間の自由の後に20年間も抑圧がつづいた1968年以降とそっくりの成り行きだ。

西欧と東欧のはざまで

スメタナが青春時代を過ごしたのはそんな時代である。祖国の政情が荒れた50年代に、しかし作曲家は祖国を去っていた。西洋音楽を学ぶためスウェーデンにわたり、得意のピアノで名をあげつつ、音楽界の泰斗フランツ・リストに感化されていたのである。リスト(派)の理念、それは一言でいえば「進歩史観」である。音楽は文学と交わることで高い段階に到達するだろう――この理念を体現した「交響詩」(およびオペラ)のジャンルにスメタナが魅了され、汎ヨーロッパ的な方向に進んだのは、だから当然な成り行きであった。そもそもスメタナが育ったボヘミア地方は、チェコのなかでも西に位置しており、西欧の影響を受けやすい土壌だったのだ(いっぽう東のモラヴィア地方には、スラヴ民謡など「東欧」の遺産を重んずるドヴォルジャークらの流れがある)。

こうした理想をたずさえて1860年に帰国したスメタナは、「国民音楽」にも目を向け、《ボヘミアにおけるブランデンブルクの人々》や《売られた花嫁》など、祖国の伝統にもとづくオペラを発表する。だがロマン派の語法に染め上げられた作風は、純粋な民族運動を音楽にも求めるチェコの論壇では、風当たりが強かった。西欧かぶれの青二才め……と言わんばかりの批判に、梅毒や難聴の発症(74年には聴力喪失)、国民劇場の指揮者辞任と、70年代には受難がつづいた。そんななか、チェコ建国の祖である王女をめぐる大作オペラ《リブシェ》と平行して温めつづけたのが、交響詩《わが祖国》である。

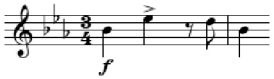
全曲初演の2年後に作曲家は世を去った。《わが祖国》は、作曲家の集大成であるとともに、西欧の語法と東欧の伝承が真正面からぶつかって融合を見せた、音楽史上の記念碑なのである。

未完の祖国

《わが祖国》はチェコ語で「マ・ヴラストMá Vlast」。初版譜にスメタナは、ドイツ語(とても流暢だった)で “Mein Vaterland” と併記している。「わが父なる国」という意味だ。故郷の名所を賛美するだけでなく、没落や戦闘や殺戮を描きこむことで「父なる祖国」への道の果てしなさを音に刻みつけたからこそ、この交響詩は世紀を超えて人に訴えかけるのだろう。6つの楽章は、中世から語り継がれる伝説の数々を描く。以下、スメタナ自身の解説文も「 」で参照しながら、各楽章を読み解こう(内藤久子訳、細部を一部改変させていただいた)。

1. **ヴィシェフラド**とは、建国の祖リブシェ王女の居城と伝えられる「高い山」であり、たびたび戦の舞台となって15世紀に破壊された。城跡はいまもプラハ近郊にある(P.15写真)。そんな神話に、耳を傾

けなさいと、冒頭からハープで私たちをいざなう吟遊詩人(☞譜例)。中盤からは、城塞の「輝かしい栄誉」だけでなく「戦いと衰退、最後の陥落」が回想される。



譜例　《ヴィシェフラド》冒頭

2. ヴルダヴァ(モルダウ)は、プラハの中心になるでしょうとリブシェが預言した川だ。冒頭に湧き出た「二つの源流」(フルート+クラリネット)が、まもなくあの有名なメロディとなって流れだす。「牧草地」に沿って流れる川は、やがてチェコの民族舞踏ポルカによる「村人の祝祭」、そして「月明りで踊る水の精」を見せてくれる。

王女リブシェ亡きあと、男と女は憎みあうようになる――

3. シャールカは侍女のひとり。男側の英雄ツチラトを蜜酒で誘惑し、惨殺する。これを知った男たちは居城ヴィシェフラドから打って出て、女たちに苛烈な復讐を果たす。第1曲のモティーフ(譜例)が激しい戦闘のテーマに姿を変えているのに注意しよう。シャールカとツチラトの愛の一幕を経て、殺戮のシーンで音楽は閉じられる。

4. ボヘミアの森と草原からは緩徐楽章だ。時が静止したその風景は、前楽章と見事なコントラストをなす。「いたるところから柔らかな歌声が空中を満たし、すべての木立、咲き乱れる野原、そのすべてが陽気でメランコリックな歌を歌う」とスメタナは記している。

ヨーロッパの国のアイデンティティは宗教と切り離せない。チェコは、カトリック大国であるハプスブルク帝国に苦しめられた。だからローマ・カトリックに反旗を翻して火あぶりにされた15世紀の宗教者ヤン・フスが、とくに英雄視される。フスたちの志を讃えるのが、最後の2つの楽章だ――

5. ターボルはフスたちの拠点だった南ボヘミアの町。冒頭にホルンが奏でる重々しい旋律は、フス派の讃美歌「汝ら神の戦士らよ」であり、全体をつらぬく。スメタナによれば、これはおもに戦士たちの「回想」のために用いられるのみで、はっきりしたストーリー展開はない。

讃美歌は、行進曲ふうに終楽章へと流れ込んでゆく。

6. ブラニークはフス派の有志が眠る中央ボヘミアの山。中間部(開始4分ほど)では、オーボエの切ないメロディを管楽器が歌い交わす。第4楽章の牧歌のムードを回想しつつ、戦士たちの憩いを歌っているのだろう。だがスメタナはこの安らぎで曲を閉じなかった。音楽はふたたび戦のファンファーレに突入し、高らかな讃歌を奏でる。ヴィシェフラドのモティーフ(譜例)をも回帰させて吹きつがれる讃歌は、未完なる祖国の到来を祈るかのようだ。

図版　霧に浮かぶヴィシェフラド. 切り立った断崖にある(筆者撮影)

作曲／1874-79年。第1曲の構想は1872年にさかのぼる
初演／第1曲「ヴィシェフラド」(1875年3月14日)ののち段階的に公開され、全曲が1882年11月5日、プラハ国民劇場横にて初演、指揮はA.チェフ
編成／ ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、ハープ2、弦5部
※指揮者の意向により、今回はホルン6、トランペット4となります。
使用楽譜／アルティア

※編成は使用楽譜に基づくもので演奏の都合上、異なる場合がございます。ご了承ください。

第396回 定期演奏会